

富貴寺大堂

参道

富貴寺の門へ続く参道の石段を一、二歩登ったところで、石のくぼみにご注目ください。かつてこれらのくぼみには油が入れられており、その油で夜の入り口を照らしていたのです。その光景はどれほど幻想的だったことでしょう。

石段を半分ほど登ったあたり、木造の表門の両側に、恐ろしい姿をした石造りの守護神が立っています。これらは仁王と呼ばれ、お寺建立のずっと後で作られたものだと思います。この地方に特有の、大変柔らかく彫像に最適の石を彫って作られたものです。右の像は口を開いて「あ（阿）」と発声し、左の像は口を閉じて「うん（吽）」と発声しています。この「阿吽（あうん）」という言葉は仏教の概念で、古代ギリシャの「ΑΩ（アルファオメガ）」のように、すべてのものごとの始まりと終わりを表しています。

この半島には石造美術の例が数多く見られることに気づかれることでしょう。お寺や道端、さらには民家の庭にまで、石造物があちこちに見られます。約 70%の日本の石造仏がこの地方にあると言われていいます。富貴寺を護る仁王像の表面は擦り切れて変色もしていますが、それはそれで今日あるお寺の姿の全体的な美しさと調和していると思われるます。

阿弥陀堂

この静かで落ち着いた美しさを持つ大堂は、国東半島の仏教遺産を伝える非常に大切な建物です。真の信者を極楽へと招く仏教の神、阿弥陀仏を本尊とする建物として平安後期（794年から1185年）に建てられました。石段の最上段には大木が2本あります。左の木は榎で、右の木は銀杏です。屋根の優雅な曲線は、仏教の神聖な動物の1つである鳳凰に似せて作られています。

国宝にも指定されているこの建物は、九州に現存する最古の木造建築物でもあります。榎の木から作られており、この木は伝説では 3000 メートル以上の高さがあったと言われています。この伝説によりますと、この木は切っても切ってもその晩にはまた元の形に戻るため、木こり達はこの木を切り倒すのに大変苦労したということです。それでもついに切り倒すことができ、お寺を完成させることができました。今日では、境内のさまざまな樹木がお寺の建物を取り囲み、お寺を一年中美しく見せています。

内部

今日見られるお寺の内部は、建立当時とは見た目が大きく異なったものとなっています。当時は、表面のほとんどに赤や黄色、青、緑といった明るい色の塗料が塗られていました。高さが 86 cmあり、建物と同じように榎の木で作られた阿弥陀像は、全面を金箔で覆われていました。それが低いひさしの下から差し込む光に照らされていたのですから、それはそれは見事な光景だったに違いありません。

今は裸状態の木柱も、かつては凝った絵柄で覆われていましたし、阿弥陀像の後ろの壁にも極楽浄土の景色が描かれていました。祈りに訪れた人々は、念仏をつぶやきながら阿弥陀像の周りを時計回りに回ったことでしょう。目が暗さに慣れたら、壁と天井がまじわる部分を見上げてみてください。何年もの年月を経て絵や色が褪せてはいますが、極楽浄土に住むたくさんの生物を垣間見ることができます。

後にこのような豪華な装飾は人気が薄れ、全国的にもっと地味で洗練されたスタイルの芸術や建築が好まれるようになりました。このような派手な建物は長年の摩滅の様子を見せる方がいいとされ、それ以来元の設計通りに修復し、その壮観さを再現しようとした人は誰もいませんでした。